



Title	ヴィオレ= ル= デュックと北斎漫画
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	デザイン理論. 2012, 60, p. 90-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53464
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヴィオレ＝ル＝デュックと北斎漫画

藤田治彦／大阪大学

中世建築の修復と『フランス建築百科事典』『フランス家具百科事典』等の大著の著者として知られる建築家、ウジェーヌ・エマニュエル・ヴィオレ＝ル＝デュック (Eugène Emmanuel Viollet-le-Duc, 1814-1879) は、パリのリベラルな知的家庭に生れ、幼い時から絵画を学び、建築に興味をもちながらも、周囲が勧めるパリのエコール・デ・ボザール (国立美術学校) をアカデミックな「型にはめる」教育の場として退け、市中の建築家に短期間学んだだけで、フランス各地の歴史的建造物を毎年訪ね歩くことによって、ほぼ独学で建築の専門家として認められるようになった人物である。

中世建築を中心とした歴史的建造物の歴史とその修復によって第二帝政 (ナポレオン3世) の信頼を得たヴィオレ＝ル＝デュックは1863年に、若い時に周囲の入学の勧めを退けたエコール・デ・ボザールの美学美術史の教授に就任する。従来の古典主義的教育に代わり、むしろ中世建築に西洋建築の原理を見出し、それを合理的に教えようとしたが、その講義は、古典主義やアカデミックな教育に慣らされ、改革を嫌う学生たちの妨害により中断を余儀なくされ、ほどなくヴィオレ＝ル＝デュックは辞任した。

著書『建築講話 Entretiens sur l'architecture』(1863-72) は、彼が完遂できなかったエコール・デ・ボザールでの講義のノートに基づく著書で、中世的建築論以上に、金属構造等を導入した合理主義的あるいは構造合理主義的内容で内外に注目され、その内容と図版を通じて、エクトル・ギマルなど、フラ

ンス国内および世界各国の若い世代に大きな影響を与えた。

十年近くをかけて『建築講話』を完成した後、ヴィオレ＝ル＝デュックは、『住宅の物語 Histoire d'une maison』(1873)、『城塞の物語 Histoire d'une forteresse』(1874)、『居住地の物語 Histoire de l'habitation humaine』(1875) など、建築や住まいに関する一般向け啓蒙書の執筆に力を注ぎ、その最後の著書は『デザイナーの物語 Histoire d'un dessinateur』(1879) であった。同書は、以下の二点で注目される。

第一に、建築家、建築修復の専門家、そして合理主義的建築思想によって知られるヴィオレ＝ル＝デュックは、若い世代にとってのデザインおよびフランスにおけるデザイン振興の重要性を認識し、唱導する、同国にとってはまれなデザインとデザイン教育の先駆者であったことが、最後の著書『デザイナーの物語』に読み取られる。このことは、ヴィオレ＝ル＝デュックがフランスの美術アカデミーとエコール・デ・ボザールにおけるクラシックな建築教育の最大の批判者であったことと考え合わせると、デザイン史研究上重要である。

第二に、ヴィオレ＝ル＝デュック最後の著書『デザイナーの物語』は、北斎および『北斎漫画』に触発されて上梓された側面が大きいことが、同書と『北斎漫画』全15編を比較すると、かなり明らかになる。『デザイナーの物語』のなかでは、レオナルド・ダ・ヴィンチと北斎 (あるいは北斎に代表される日本の絵師) が対等に比較されており、ヴィオレ

＝ル＝デュックの「デザイン観」「デザイナー観」を知る上で興味深く、私たちに、「デザインとは何か」「デザイナーとは何者か」を再考する機会を与えるという意味でも、同書は重要である。

『デザイナーの物語』は、幼い少年ジャンが、その素描の才能を見抜いたマジョリン氏から、動植物のかたち、透視図の世界、地形や地球の見え方など、体系的なものの見方としてのドローイングあるいはデザインを学び、ヴィオレ＝ル＝デュック同様、エコール・デ・ボザールには学ばず、権威的・形式主義的ではなく、より合理的で実践的なエコール・サントラルに学び、パリの工場経営者たちに名の知られたデザイナーになって行く物語である。

マジョリン氏は、ヴィオレ＝ル＝デュックが幼いころ絵を学んだ伯父ドゥレクリューズを想わせ、やや自伝的要素があるが、ジャンは建築家や著述家になるわけではないので、『デザイナーの物語』はヴィオレ＝ル＝デュックの自伝ではない。また、エコール・デ・ボザール批判が随所にちりばめられているところなどは、内外に知られた建築著述家の最後の著作としてはあまりにも生々しく、素人を対象とした物語とはいえ、ある意味で幼い印象を与える。しかしながら、『デザイナーの物語』は、ヴィオレ＝ル＝デュックのデザイン観を興味深いかたちで書き留めた貴重な記録であることに違いはない。

『デザイナーの物語』に読み取る限りでは、ヴィオレ＝ル＝デュックの理想のデザイナーはレオナルド・ダ・ヴィンチであった。また、同書は、そのテキストや挿図からして、その執筆時期に全15巻が完成しパリにもたらされていたと想像される『北斎漫画』に示唆され、まとめられた側面が大きい刊行物であるように思われる。

ヴィオレ＝ル＝デュックにとっての「デッサン（デザイン）」は、フランスの美術アカデミーやエコール・デ・ボザールの支配下に矮小なものと化してしまっていた「デザイン」ではなく、世界の見方を知り、小さな家具や道具から、大きな建造物まで、すべてをつくる「デザイン」であった。

美術アカデミーが生れる前に生きたレオナルド・ダ・ヴィンチ、西洋の美術アカデミーの外側に生きた北斎、そして、美術アカデミーに徹底的に対抗して生きたヴィオレ＝ル＝デュック。彼はレオナルドと（実際には名前を知らなかったであろう）北斎に、日々描き続ける、自分と同じ万能のデザイナーの姿を見ていた。ヴィオレ＝ル＝デュックにとっての「デッサン」は、ジョルジョ・ヴァザーリの言葉を借りるならば、「絵画、彫刻、建築の父」としての「デッサン（ディゼーニョ）」なのである。

『デザイナーの物語』の終わり近くでは、「産業芸術 l'art industriel」という言葉が否定的に参照される一方で、後のバウハウスを想わせるような実践的な工房教育の試みにも触れられており、概して、産業デザイン教育においてはイギリスに後れをとっていたとされるフランスの書物の内容としては意外で、フランスのデザイン史、とくにデザイン教育史の隠れた一面が読み取れる。ヴィオレ＝ル＝デュックにとって「産業芸術 l'art industriel」に代わる言葉は、『デザイナーの物語』の書名と内容からすれば、「l'art du dessin デザインの芸術」、つまり造形芸術あるいは最広義の「デザイン」であったのだろう。